若者の自己発見・自己表現としての「持ち寄り写真投影法」
―各撮影テーマにおける多次元的アイデンティティの表現方法の比較検討―

Photo Projective Method as a Tool of Self-discovery and Self-expression for Adolescence: The Different Expression of the Multiphasic Identities of Participants on Each Theme

キーワード：写真投影法、自己発見、自己表現、多次元的アイデンティティ

大石　千歳

問題意識と本研究の目的

若者の自己理解や自己表現の手段としての写真投影法

写真投影法とは、個人の内的世界とりわけ自己のアイデンティティを、写真を用いて視覚的に表現する方法である。野田（1988）[1] が行った「写真による環境世界の投影的分析方法」が、写真投影法の端緒とされる。野田（1988）の『漂白される子供たち』では、多くの子どもたちに3～4本のレンズ付きフィルムを渡し、「一日の生活、および好きなもの」というテーマで写真を撮影してもらった結果が報告されている。

その後の心理学分野での写真投影法を用いた研究には様々なものがあるが、中でも写真投影法を自己のアイデンティティの把握や表現の手段として用いた研究として、大石（2010）[2]『アイデンティティの表現方法としての写真投影法』がある。また、アイデンティティの表現や自己理解の手段として写真投影法を用いるという研究には、他にも田澤（2010）[3] の『写真投影法を用いた自己理解教育の試み』が注目される。

田澤（2010）では、キャリア教育の一環として、福祉系専門学校生の進路選択を助けるツールとして、写真投影法の有用性を検討した。12名の学生に27枚撮りのインスタント・カメラを渡し、「あなたがどのような人間であるか分かるような写真を一週間以内に撮ってください（例えば、自分の大切にしているものや好きだと思うものを取って下さい）。（中略）撮った写真の中からいくつかを選んでもらい、後ほど授業でなぜその写真が好きなのか解説していただきます。」という教示に従って、撮影をしてもらった。

田澤（2010）では、撮影枚数は個人差はあるが20枚前後であること、好きな写真は10～13枚目に出現すること、撮影カテゴリーは頻度の多い順に「物」「場所」「友人」「家族」「風景」「恋人」「自分」であったことを発見した。田澤（2010）の研究目的は、「写真投影法を将来の進路選択に生かすことができるかを検討すること」であった。そこで、卒業を前にして写真投影法が進路選択に役立ったと思うかを尋ねたところ、役立った（はい）と答えた撮影者は12名のうち5名であった。役立った理由は、自分の見つめ直しが出来た、好きなものや不向きなものが認識できたというものであった。役立たなかったと答えた人が挙げた理由は、すでに進路が明確に決まっていて写真投影法の影響は受けなかった、撮影した内容が進路とは無関係のものであった、などであった。これらの結果から田澤（2010）は、写真投影法は自己理解や進路選択に関して、ある程度の効果をもたらしたものと結論づけている。

「持ち寄り写真投影法」の効用と本研究の目的

大石（2010）では「過去に撮影された写真を持参してもよい」「写真について撮影者が語る」という形式で

実施される写真投影法を、特に独自の実施方法として、「持ち寄り写真投影法」と命名している。本研究における写真投影法も、この「持ち寄り写真投影法」の方式で行われる。この方法は、田澤（2010）などの他の先行研究における実施方法と異なる独自の実施方法である。

個人のアイデンティティの把握や表現に関する「持ち寄り写真投影法」の効用を、大石（2010）の研究1では以下の4点にまとめている。

1. 語りの糸口としての機能：写真は語り手本人が選んだ語りの糸口で語る側の個別性を尊重できる。
2. 客観性を高める機能：語りに対するインタビュアーの主観的解釈を減じ内容の客観性を高める。
3. 投影法としての機能：アイデンティティについて本人が自覚していない部分まで捉えられる。
4. 過去の出来事のイメージの修正：当該時点での思いを鮮やかに想起しやすく、その出来事に現在抱いているイメージとのずれを埋められる。

また大石（2010）の研究2からは、撮影テーマの設定のしかた（「私の大切なもの」「あなたはどんな人ですか」「あなたの今の気持ち」）によって、写真の撮影内容が異なってくることが明確にされ、非常に興味深い結果が得られた。しかしこの研究では撮影者は1人のみで、結果の一般化が困難であった。

上記を踏まえて本研究では、大石（2010）研究2と同じ3つの撮影テーマについて、複数人を対象に写真投影法を行う。撮影者間での写真や語りの内容の比較を行うとともに、大石（2010）の研究1、研究2の撮影者との比較も行い、撮影テーマごとの特徴を抽出する。語りの内容をErikson（1959）[4]の自我同一性（アイデンティティ）における「対自的同一性」「対他的同一性」「自己の斉一性・連続性」および「心理社会的同一性」と関連させた分析・考察をさらに蓄積することにより、若者は自己発見・自己表現のツールとして写真投影法をどのように活用するのかについての考察を深める。

本研究を含んだ本稿著者の長期的な研究目標としては、田澤（2010）がキャリア教育（進路の選択）に対する写真投影法の効果を検討しようとしたように、近年非常に身近になった写真を用いて若者が自分の過去を振り返り、現在を見つめ、未来への自分の願望や目標を確認する方法として、この「持ち帰り写真投影法」を発展させたい。そしてこの方法を、キャリア教育・就職活動はもとより、個々の学生に対する心理教育を含めた大学教育の様々な側面に生かす方法として確立させたい。

方　法

写真撮影者

東京女子体育大学3年生4名であった。写真投影法は、本研究者のゼミに所属する学生が卒業研究の一部として、インタビュアーを担当した。撮影者には、事前に研究の主旨を説明し、興味をもってやってみたいと立候補してくれた学生に参加してもらった。インタビューは発言と写真の内容の記録のためにビデオ撮影するが、アングルを工夫し顔は撮影しない（写真を持つ手元しか映らない）こと、プライバシーに配慮し必要なくなった資料等は処分すること、研究結果はインタビュー学生の卒業研究の一部となること、後に本学紀要に論文として投稿される予定があることを説明し、了解を得た。写真は、ビデオカメラに向けて撮影内容を写した後、本人に持ち帰ってもらった。

使用機材

撮影者の写真撮影用としてデジタルカメラ、インタビューの記録用としてビデオカメラを用いた。デジタルカメラは各撮影者が自分自身のものを用いた。

撮影枚数

各テーマにつき5～10枚とした。

所要時間

一人に対するインタビュー時間は、3つのテーマを合計して最短60分～最長90分、すなわち授業1校時分に収まるようにした。大石（2010）ではもっと多くの時間（1つの撮影テーマに関して60分～90分）を

とったが、同一人物が3つの撮影テーマについて語るには時間が長かったため、今回はこのような時間設定とした。

インタビュー聞き手

東京女子体育大学3年生1名が、写真を用いた卒業研究（和田、2011）[5]の一環として行った。なお、本研究者がオブザーバーとして同席したが、発言はせず、聞き手学生に進行を任せた。

写真撮影の手続き

各撮影者にデジタルカメラで3つの撮影テーマに関して撮影してもらった。また、どの撮影テーマに関しても、新しく撮影するのみならず、すでに持っている過去の写真を持参してもよいこととした。

インタビュー手続き

撮影者に対して1人ずつ、聞き手によるインタビューを行った。写真の撮影者と聞き手が向かい合って座り、オブザーバーとして本研究者が同席した。オブサーバーはインタビューの進行状況の確認とビデオカメラの操作のみを行い、発言はしなかった。

各テーマごとに、撮影したあるいは持参した写真を、自分にとって大切な順に並べてもらった。似たような写真が複数ある場合は、グループにまとめてもらい、グループ単位で扱った。

各撮影テーマごとに、写真について話を聞く際にはまず「何の写真なのか」を質問することとし、あとは自由に話をしてもらった。一通り話し終えたら、このテーマで撮ってみての感想、苦労したところ、楽しかったところについて尋ねた。次いで撮影期間の長さは適切か、枚数の設定は適切か、および聞き手に対しての要望について尋ねた。

インタビュアー（聞き手）の学生は、撮影者が会話を進めやすくするために、ロジャース派カウンセリングにおける応答技法を勉強し、インタビューを進めた。

結果の集計手続き

インタビューはビデオ撮影をし。インタビュー学生がビデオ起こしを行い、プロトコルを記録した。

撮影者のプロフィールAさん：大型犬を数匹飼っており、犬が大好き。犬を通じた人々との交流も好き。

Bさん：幼少時はあるスポーツに打ち込んでいたがうまくいかなくなり、様々なことに挑戦し、今日に至る。人と関わることが好き。

Cさん：アルバイトである仕事に取り組み、資格取得に向けて頑張っている。その仕事は「天職」であるという。

Dさん：あるプロスポーツの熱心なファンで、一生懸命応援に行っている。

このうち本稿では、撮影のしかたの相違が明確になる撮影者として、BさんとCさんを取り上げ、インタビュー・プロトコルを抜粋して掲載する。なお、AさんDさんのプロトコルを掲載しないのは、単に紙幅制限の問題からである。AさんとDさんにおいても、写真投影法を楽しみ、実施において自分の新たな側面を発見してくれたことは言うまでもない。

結　果

撮影テーマ1：「私の大切なもの」

Bさんは5枚の写真を持参した。

1枚目：家族で出かけた時の写真

聞き手：よくこうやって家族で出かける？

Bさん：でかける！仲良いってか、週に1回はご飯食べに行くし（以下略）

2枚目：愛犬の写真

Bさん：見ての通り愛犬です！小学校の間ずっとためてたお年玉で買った！（中略）なんか犬好きで家族みたいに思う気持ちはあるんですけど（中略）家に来てよかったなって思えるようにはなってほしいですよね～（笑）

3枚目：以前やっていたバンドの写真

Bさん：私歌うことがずっと大好きだったんですよ！別に歌手になりたいとかは全然なくて、でもカラオケとか大好きで（以下略）

聞き手：うんうん

Bさん：それが自分の中ではスポーツ以外のことやったことなかったから、思い出的にはすごい大事かな的な！

4枚目：お酒の写真

Bさん：晩酌するし、まあ友達と飲みにも行くし・・かな。もう冬はおつまみが1番美味しい季節

だから、くさいものとか魚とか～だから熱燗が最高！みんなで酔っぱらって話す雰囲気とかも好きだし、話すことが好きだしお酒の味も好きだし、全部好き！（以下略）

5枚目：ショップバッグの写真

Bさん：自分の彼氏の写真を写すわけにもいかず、まあこの写真じゃなくても良かったんだけど。なんか彼氏の話とか普通しないよね！（笑）

Cさんは、5枚の写真を持参した。

1枚目：昔からやっていた競技のシューズの写真

Cさん：小学校の時から使っているスポーツのシューズです。

聞き手：今もやってるの？

Cさん：今はやってないんだけど、用具を見ない生活を送ったことがなくて、常に競技のことを考えて生活していたから今やめてる期間も用具を見て忘れないようにしてる。

2枚目：友人が作ってくれたマグカップの写真

Cさん：（スポーツに関して悩みがあった際に）地元の友達が1人じゃないよって作ってくれたもの。地元帰ろうかなって思ってた時にそんな弱気じゃだめだよーって。これでもう少し頑張ろうって思えた。

3枚目：今使っている手帳の写真

Cさん：高校生から競技を本格的に始めて、ちゃんとスケジュール管理して頑張ってた。日記も書いててつらい時とか読み返してあの時頑張ってたなとか思い出す。今は弱ってる時期だから見て頑張ってる。

4枚目：部屋に貼られた写真を撮影した写真

Cさん：3年の夏に帰った時の写真。楽しくて、ちょうど写真を撮るのが好きになった時でいっぱい撮ってた。

聞き手：人が全然写ってないね。

Cさん：人を撮るのはあんま好きじゃなくて人は目にやきつけておく。

聞き手：なんでこの写真にしたの？

Cさん：この空間を見るのがすき。

5枚目：以前撮影した海の写真を写した写真

Cさん：全部海の写真。これも地元の写真でほんと癒し。地元帰った時で200枚くらい撮った。動物とか海とかいっぱい！水族館行っても8時間くらいずっと写真撮ってる（中略）。

聞き手：全部ものだよね？

Cさん：自分で撮りながら人とるのが苦手なんだってわかった。人の大切なものは自分の中だけでいいやって。今東京で撮りたい人物がいなかったから、地元帰ったらまた違うんだろうけど。

撮影テーマ2：「あなたはどんな人ですか？」

Bさんは、5枚の写真を持参した。

1枚目：幼少期の写真

Bさん：とりあえず小さい頃はおてんば！ずっと自分が中心でいたいし、いじめとか無縁！いい感じに他人に興味ないし～（中略）

聞き手：目立ちたい！じゃなくてこれやりたい！みたいな。

Bさん：そうそう！（中略）

聞き手：なんかこれが人生を象徴している感じだね～

Bさん：ね！これ見て「あ！今の自分だな！」って。泥にまみれてもって。

2枚目：小学校入学式の写真

Bさん：これは小学校入学式の写真で、話さっきとかぶっちゃうんですけど6年間ずっとこんなかんじ。あきらかに目立ちたがり屋だし～でも先生が怖かった！あとはこの父親と母親に育てられてきたってのを見せたかったんだと思う。

3枚目：小学校卒業式の写真

Bさん：この時初めてスポーツをやめたんです。全国大会みたいの出た時に（中略）たぶん人生初の挫折？で、（中略）6年間の頑張りがプツンと切れて！今まで何も遊べなかったし、まあ強制されてやってたわけじゃないし自分が好きでやってたんだけど・・・挫折して、パンときれて。みんなみたいに学校終わったら遊んで～夜帰って～みたいのがしたくて（後略）。

4枚目：高校時の写真

Bさん：高校生になって、またスポーツを始めるんですよ！今度は弱小チームなんですけど、弱いチームだから自分が1番になってしまうんですよ！（後略）

5枚目：大学入学式の写真

Bさん：（中略）思い描いていた大学生活じゃない！ってのが最初。でも今は・・・楽！！こんなに飾らなくていい！化粧しなくていいしどんな恰好してきてもなんも言われないし、むしろちゃんとしたほうが何で～みたいな（笑）だから入ってよかったかな。

Cさん：5枚の写真を持参した。

1枚目：家計簿の写真

Cさん：家計簿つけてます。

聞き手：お金とかきっちりする人？

Cさん：うん。子どもの時からお小遣い帳とかつけてる。

2枚目：クローゼットの写真

Cさん：掃除が大好きで時間があればとことん掃除する。こうじゃなきゃヤダとかはないけど平日の午後の空いた時間とかいつも掃除していつ人が来ても大丈夫なようにしてる。

3枚目：ハヤシライスの写真

Cさん：前は自炊してなかったけど仕事するようになってからするようになった。料理作るの楽しい。ホットプレート買って友達と焼き肉やったりする。

4枚目：冷蔵庫に入っているビールの写真

Cさん：ビールと自分で作ったお茶を必ず入れてる。

聞き手：ビールは1人でも飲む？

Cさん：毎日1本は飲んじゃう（笑）なんか働き終わったって感じ！お酒は良く飲む。

5枚目：歌手のタオルの写真

Cさん：最近好きになった歌手。声に惚れて。兄弟3人で夏にライブ行った！（中略）

聞き手：この歌手はCさんにとって・・・

Cさん：心のよりどころ！寝る前に流したりしてる。

撮影テーマ3「あなたの今の気持ち」

Bさんは、5枚の写真を持参した。

1枚目：履歴書の写真

Bさん：エントリーシート何書こうとか説明会行ったりとか1番厳しい時期だから、就職が1番の夢だし今までの中で1番のターニングポイントになると思う！（後略）

2枚目：おせち料理の写真

Bさん：これはおせち！料理作るのが大好きで初めて自分で勉強して全部作ったの。煮しめとか何がめでたいのとか全部つくって（後略）。

聞き手：料理は作って・・食べてもらうのが好き？

Bさん：食べてもらうのも好きだし、もっと上手くなりたいと思って！この写真は自慢したかっただけ（笑）

聞き手：うん！すごいもん！！！

3枚目：海で泳いでいる昔の写真

Bさん：これすごい古い写真なんだけど、人生で初めて海外に行った写真（中略）。これみてて思ったのが、最近留学してた友達帰ってきたんですよ。そしたら人間が180度変わってて（笑）。今まで内気な普通の女の子だったのに、帰ってきたら自信に満ちあふれてて自分は誰に否定されようが私は私だし、もっとハッピーに生きようよ～！みたいな。ちょっとうざかったんだけど（笑）

4枚目：子どもにスポーツを教えている時の写真

聞き手：始めてから少しづつ考え変わった？

Bさん：変わった！！はじめは生徒と一緒に黙っちゃってた！！（中略）楽しい時は楽しい～って素直にリアクションしてくれる。悲しい時は何回でも泣くから自分が言って泣いたりした時はあ～これが嫌だったんだなとか、じゃあこれを直さなきゃとかってのが普段の生活にも生かされてくるんだよね。自分の一言でこんな気持ちにさせるんだとか、だから人をもっと褒めたいなとか思うし・・・

5枚目：スポーツをしている写真

Bさん：（前略）女の子のチームに練習参加させてもらってるんだけど（中略）これから頑張りた

いこと！中学でスポーツやめた時はまったく未練なかった！一生やんないって。自信なかったんだよね。一線まで行けない自分？レベルが低いってことで、自分でバカにして中途半端になってたんだと思う。（後略）

Cさんは、5枚の写真を持参した。

1枚目：資格取得のための勉強の本の写真

Cさん：仕事は厳しいけど学ぶことが多くて1番成長した。（高校のときは）勉強とスポーツとやりたいこと2つ両立してたから後悔ない感じで。大学来てスポーツだけになった時はちょっと辛かった。（中略）地元じゃあまり学べないから。

聞き手：学びたいって気持ちが強いんだね。

Cさん：今は将来に向かってる。

2枚目：マスクの写真

Cさん：風邪ひいたら仕事になんないから。健康と美容は大切。だし、1人暮らしだから風邪ひいても看病してくれる人がいなーい！（笑）夏からマスクしてるもん、常にストックしてある。

3枚目：障害者スポーツの雑誌の写真

Cさん：障害者スポーツも勉強している。ボランティアで障害者スポーツも教えてるから講習会とか参加したり。東京に来なかったら障害者スポーツと関わることなかったかも。地元は規模が小さいし練習も単調でレベルが低い。

4枚目：化粧品の写真

Cさん：身だしなみ。人と接する仕事だからちゃんとしなさいって（中略）。周りは結構そういうの見てるからケアはちゃんとしてる。後から注意されるのは嫌だから最低限やれることはちゃんとしておきたい。

5枚目：メイク用品の写真

Cさん：仕事では薄めで他はしっかり化粧する。

聞き手：仕事の話ばっかだけど他は？

Cさん：今は仕事ばっか。地元帰るのわかってるから今は東京で頑張って頑張って吸収して地元を変えていきたい。

考　察

各テーマにおけるBさん、Cさん、大石（2010）の撮影と語りの比較

撮影テーマ1「私の大切なもの」

このテーマに関しては、BさんとCさんの比較結果を紹介する。

＊Bさんの写真と語りの特徴

Bさんは1枚目の家族の写真を見ながら、聞き手に対して、家族仲がよいこと、両親に愛されて育ったこと、反抗期には両親に迷惑をかけたこともあったこと、20歳を過ぎて家族のありがたみを実感したこと、家族がとにかく大切な存在であることなどを、元気な様子で語ってくれた。2枚目の愛犬の写真、3枚目のバンドの写真は過去に撮影された写真を持参している。

「私の大切なもの」というテーマに関するBさんの写真の選択と語りの特徴は、過去から現在に至るまでの自分のライフストーリーを振り返り、大切な人や愛犬などと自分の関わりを表す写真を選び、「このときの自分はこうだった」ということを語るというスタイルである。

Bさん自身の感想としても、「私の大切なもの」というテーマは、写真を最も選びやすかったという。「高校中学の友達とかいっぱいあった！いっぱいだから思い出いっぱい考えて選んできた！思い出も大切じゃない？友達とかも大切だけどこのころこんなことやってた自分大切って！」とのことである。また、写真投影法自体について「すごいおもしろい！！今回これやってよかった！！大変だったけどね」との感想を寄せてくれている。

Erikson（1959）のアイデンティティという観点でいえば、Bさんにとってこのテーマは、過去から現在に至る自分を特徴づけるもの、すなわち「自己の斉一性・連続性」や「対自的同一性」を表す写真が中心となったといえる。

＊Cさんの写真と語りの特徴

Cさんは、Bさんとは異なり、写真はこの研究に参加するにあたって新たに撮影されたものが中心であった。また、写真は「モノ」や海を枠いっぱいに写

したもので、自分や他人など人間の姿はない。Cさんは「私の大切なもの」といわれたとき、自分の大切な過去や人間関係などを象徴する「モノ」を大きく撮影し、余白はほとんどないというスタイルであった。

Cさんの「枠いっぱいにモノ（対象）を撮る」という撮影方法は他の2つの撮影方法でも共通していた。聞き手を務めた学生は、モノだけを枠いっぱいに撮影している写真をみて、「あまり立ち入ったことを尋ねてはいけないのかな、あまり自分のことを話したくないのかな」という感想をもったそうである。しかしCさん自身には、聞き手が懸念したような気持ちは全くなかったという。このような構図の写真になった理由としては、「結果が大事。言い訳は必要ない」という、日ごろの考え方が反映されているのではないかと考察していた。私の大切なものいう撮影テーマに関して、要求に応じて文字通り「モノ」を撮影したということであろう。 Cさんはあるアルバイトを熱心にしており、資格取得を目指している。結果が大事という考え方は、その仕事をする際に結果が問われる厳しさを体験していることに起因しているそうである。

アイデンティティに関する対自的・対他的といった分類としては、特にどれかの分類に集中した写真の内容にはなっておらず、さまざまなアイデンティティの構成要素が含まれていたといえる。

＊大石（2010）研究1の撮影者との比較

撮影者はあるスポーツの競技成績の高い学生（Aさん）であり、「私の大切なもの」という撮影テーマで写真投影法を行っている。このテーマにおける撮影と語りの内容は、Marcia（1966）[6]の自己投入という要素を明確に表現していた。高校時、大学時の写真を通じて、1つの競技に打ち込んできた自分を確認する撮影内容となっており、Erikson（1959）「自己の斉一性・連続性」がよく表現されていた。両親の写真も、幼い頃から現在に至るまでの自分の核となるものとして、このカテゴリーに分類された。競技に専心することで、「対自的同一性」を確立し、競技成績が表彰を受けたりすることで「対他的同一性」および「心理社会的同一性」を確立していった様が明確に表れていた。

＊大石（2010）研究2の撮影者との比較

研究2では、1名の撮影者が「私の大切なもの」「あなたはどんな人ですか」「あなたの今の気持ち」という3テーマにより撮影した写真を比較した。「私の大切なもの」というテーマは、「対自的同一性」や「自己の斉一性・連続性」を代表すると考えられた。このテーマでは、自分の大切な人や物という、形ある対象がフレームに収められた。撮影を進めていくうちに、家族や親戚、友人などに支えられて今日の自分があること、毎日の勉強とアルバイトに疲れて見失いがちになっていたが自分には大きな夢があることを再認識できたという。この撮影テーマによって、ロジャース派カウンセリングでいう「今、ここで（Here and Now）」と、その積み重ねが将来につながっていく感覚を持った。「自己の斉一性・連続性」が表現され、再確認された。

撮影テーマ2「あなたはどんな人ですか」

この撮影テーマに関しては、Bさん、Cさん、大石（2010）研究2の撮影者の比較結果が興味深い。

＊Bさんの写真と語りの特徴

このテーマでは、Bさんは体育大や女子大への進学は想定外であったと述べながらも、今では本学によさを感じていると語った。Bさんは、自分の生い立ちを振り返るように、幼少期、小学校入学式、小学校卒業式、高校時代、大学入学式という時系列的なつながりを感じさせる写真を持参した。入学式や卒業式など、人生の節目となるセレモニーに関する写真を持ってきて、その時期の自分のことや親子関係について語った。特に親子関係については、その時々で様々な葛藤があったこと、親から認められたいという気持ちがあったことなどを、表情豊かに語ってくれた。これらは「対自的同一性」「自己の連続性・斉一性」を表している写真内容といえよう。また、親子関係や友人への言及も多く、他者との関係性における自分という、「対他的同一性」も重要な要素として表現されたといえる。昔撮影された写真は、Bさんにとってその時々での挫折や、そこから立ち上がったことを思い起こさせるもので、それらの体験が現在の自分を

作っていることを主張していた。

Bさんの写真は、このテーマでもすべて、自分と他者（家族や友人など）が写っている、人物写真であった。Bさんは、聞き手からそのことを指摘されて、常に自分の周りには人がいてくれること、周りの人のおかげで今の自分があること、友人は、いてくれて当たり前と考えず感謝すべきであることを語っていた。

また、大学3年生の冬という時期は、企業への就職活動を始める時期であり、大学生にとっては進路選択を実際の行動に移す節目の時期である。Bさんの写真の選択には、写真投影法がこの時期に行われたことによる影響もあるかもしれない。Bさんは、インタビューの中で生い立ちを語りながら、その連続として今の自分があること、一人前の大人として自立したい、就職活動を頑張りたいとの思いを語っていた。就職活動という、自分が社会に参加し何らかの役割を担うという側面が、この撮影テーマに影響を与えたとするならば、このテーマは「心理社会的同一性」を喚起するものであったといえよう。

ちなみに、この撮影テーマに関するBさん自身の感想としては、自分の生い立ちやターニングポイントを語る上で、写真の存在は非常に役に立つもので、写真がないと他者にうまく説明をするのが難しいとのことであった。また、中学・高校時代の写真は、たくさんあったがほとんどプリクラ（小さなシール型の写真）で撮影されたもので、持参できなかったといって残念そうにしていた。日頃から、写真は沢山撮影して取っておいたほうがよい、との感想をもったそうである。

＊Cさんの写真と語りの特徴

Cさんは、自分が持参した写真と語りを通じて、自分では人に言いきれないところを説明できたという。たとえば、このテーマでは家計簿の撮影をしているが、普段は友人に家計簿を見せることなどはないという。撮影枚数については、自分がどんな人であるかを表すには、それほど多くの写真は必要ないとの思いがあったので、この枚数にしたという。

Cさんに特徴的な点として、撮影時の居住状態による影響を指摘していた点が挙げられる。撮影時は大学近くで一人暮らしをしていたので、実家においてあった卒業文集の撮影ができなかったなど、実家にいる期間に行っていれば、自分がどんな人間かを表す写真として、今回とは全然違った写真を持ってきたかもしれないと述べていた。過去の写真を持参してもらう場合は、このような点に注意する必要もあろう。アイデンティティという意味でいえば、今現在の生活の様子を物語る撮影対象が選ばれているという意味で、「対自的同一性」を表す写真内容であったといえる。

＊大石（2010）研究2の撮影者との比較

大石（2010）研究2の撮影者は、このテーマでは、他者から見て「この人はこんな人だ」と一目でわかる写真を撮影していた。しかし一方で、他者からのイメージとは異なる「本当の自分」を表現したいという写真も多くみられた。 各写真は「私はこの家で生まれ、こんな道を歩み、こんな一面もある」という流れで自分を紹介する構成になっていた。他者からみた客観的な自分の姿（公的自己）と、自分自身が思う本当の自分の姿（私的自己）の乖離が明確になる撮影テーマといえた。前者は「対他的自己」、後者は「対自的自己」を表している。「他者から見られる自分」すなわち「対他的自己」という視点を重視していた。

撮影テーマ3「あなたの今の気持ち」

この撮影テーマに関しても、Bさん、Cさん、大石（2010）研究2の撮影者の比較結果を紹介する。

＊Bさんの撮影と語りの特徴

Bさんは「あなたの今の気持ち」という撮影テーマを、「いま頑張りたいこと、頑張っていること」と捉えて写真を持参してくれた。こんなことを頑張っているよ、という写真については、照れ隠しもあってか「自己満足じゃん？」などという思いも述べている。写真に写った自分の姿や語りは、「こんなことをやっている、こんなところに行った」というポジティブな内容でありたいという。アイデンティティという観点でいえば、この撮影テーマは「対自的同一性」を示す写真内容であったといえる。

また、Bさんは人の笑顔が好きだから、「空の写真を見せられて心打たれるよね、といわれてもよくわか

らない」という。今回の写真投影法を通じて、写真には写っている人の特徴がよく表れ、面白いとの感想を持ったため、人物が写っていない写真にはいまひとつ興味が持てないとのことであった。

＊Cさんの写真と語りの特徴

Cさんは、現在アルバイトで熱心に取り組んでいる仕事が大好きで、「天職って感じ」と述べている。このテーマに関しては、CさんもBさんと同様に「いま自分が頑張っていること」を表す写真を持参してくれた。Cさんにおいても、この撮影テーマは「対自的同一性」を表しているといえる。

＊大石（2010）研究2の撮影者との比較

BさんとCさんにおいては、「あなたはどんな人ですか」および「あなたの今の気持ち」という撮影テーマにおける撮影内容はさほど違いはなく、どれも「いま自分が頑張っていること」という、対自的同一性を表す内容が中心であった。「あなたはどんな人ですか」という問いは、アイデンティティのあり方を問う最も直接的なものである。自分の打ち込むものや将来の方向性が明確に定まっている場合、すなわちアイデンティティの確立過程における自己投入（Marcia、1966）ができており、そこから日々充実感を得ていると、「あなたの今の気持ち」は、「あなたはどんな人ですか」という問いへの答えと類似したものになるといえる。

一方、大石（2010）の撮影者の場合、このテーマで撮影されたものは、道で見かけた大木や民家、地元の山々、家の布団、教員採用試験の願書、地元の家族や友人、地元に帰るための新幹線の切符、社会人の象徴としてのスーツのパンツ、卒業式と書いてある手帳のページなどであった。大石（2010）の撮影者は、将来の進路を明確にしきれていなかった時期であり、悩みや迷いを持っていた。そういう場合、このテーマによる写真の内容は、自己の悩みや願望を投影する自然の風景や、現在持っている願望（将来の進路から、最近疲れているのでよく寝たいというものまで）を表すものになるようである。撮影内容は、今の瞬間およびここ数日の短期的な状態を表すものと、人生の中で現在の自分が置かれた立場（将来の方向性を決める途上で悩みもあるなど）を表す写真が多かった。もっと大きな人物になりたい、自分を律したいというものから、日々の生活での癒されたい、眠りたいといったものまで、「願望」や「目標」を表す写真が多くなった。

まとめ――各撮影テーマの特徴について

撮影テーマ1「私の大切なもの」

「対自的同一性」「自己の斉一性・連続性」を表す写真内容になることが多いようであった。過去の自分が経てきた人生の節目を回想したり、過去に自分が打ち込んできた事柄を示す写真を選んだりするようであった。また、そういったエピソードにおいて自分の周りにいた人々（親や友人など）に思いをはせるという側面が強くなると、「対他的同一性」という要素も含まれてくることになる。

撮影テーマ2「あなたはどんな人ですか」

「対自的同一性」「自己の斉一性・連続性」に加えて、親や友人や周囲の人からみた自分の姿という意味で、「対他的同一性」を表す内容も含まれることが多くなるようである。

撮影テーマ3「今のあなたの気持ち」

現在自分が打ち込むことが見つかっている人はその内容になり、迷いや悩みを抱えている場合には、風景や自然など、少し抽象的な撮影対象に自己の内面を投影させたりするようである。

撮影者の個人差としての撮影内容の違い：人物を登場させるか否かという点が注目される。ほぼすべての写真に自分やその周囲にいた人々を登場させる人もいれば、どの写真にもほとんど人物が登場しない人もいる。写真の撮り方にはその人自身の人生観が投影されているといえる。ただし、本研究のCさんの写真にはほとんど人物が登場しないが、人とのつきあいが少ないわけではない。写真に登場する人物の数と撮影者の人間関係のあり方は、直結するわけではない。今後は、写真の内容に直接的に影響を与える要因は何か、探ってゆくことができればよいと考えている。

「持ち寄り写真投影法」が撮影者自身に与える影響

Bさんについて

写真を用いて過去のエピソードについて語るときには、撮った時の気持ちに戻るという。写真に色を付けて、その時のことを生き生きと話したいと思ったという。写真は動かない画像であるため、それでは自分のことを話しきれないような気がして、自分が写っているDVDを持ってきたかったくらいだという。しかし、動かない画像であることがかえっていいのかもしれないとも思うという。写真を使うと話しやすくなるため、自己紹介に写真を使うのはよいアイデアではないか、との提案をしてくれた。大石（2010）では、写真投影法による自己発見の効果が示されたが、さらにBさんは他者に自分をよりよくわかってもらう手段としても使うという部分に着目したといえる。

Cさんについて

Cさんは、写真を使って話すことに関しては、普段やらないことであるため、緊張したという。話をしているうちに、普段何気なくやっていたことでも、自分がこんなにいろいろ考えていたのだということに気づいたという。先述のように、写真投影法が持つ自己発見の効果については大石（2010）研究2の撮影者も言及していたが、Cさんも同様の感想を持ったようである。

語り手から、Cさんの写真には撮影対象の周りに背景が写っていないものが多く、語ってもらわないと何もわからない写真が多いのが特徴的だ、との指摘をされていた。この点に関してCさんは、「それ納得！そういう性格みたい」と答えた。普段友人と話すときにも、当該のトピックのみを話し、前後の経緯を話すのはあまり好きではないそうである。アルバイトで熱心に取り組んでいる仕事から、過程はともかく結果をきちんとすることを学んだことの影響だと推測していた。

本研究における「持ち寄り写真投影法」とは何であって何でないか

1. 本研究における「持ち寄り写真投影法」は、著名人でも患者・クライエントでもない一般の若者の、自己理解および自己表現のツールである。
2. 本研究における「持ち寄り写真投影法」は、精神科・臨床心理領域における患者・クライエントに対するアセスメントツール（心理検査）ではない。
3. 本研究における「持ち寄り写真投影法」は、精神科・臨床心理領域における患者・クライエントに対する治療的面接に用いるための技法ではなく、面接におけるインテイクの手段でもない。
4. 本研究における「持ち寄り写真投影法」は、著名人の伝記の制作を補助する技法ではない。
5. 本研究における「持ち寄り写真投影法」では、成長による過去の出来事の捉え直しも重要であると考えている。

この5点をふまえ、「持ち寄り写真投影法」の対象者、目的、活用の将来的なあり方についてまとめた。

本研究は、「持ち寄り写真投影法」が「若者の自己発見・自己理解・自己表現に資するツール」として有用であることを示すために行われ、教育場面での活用を念頭において研究された。心理学はともすれば、患者・クライエントなど、援助的ニーズを持った人々を研究対象とする場合が多くなりがちであるが、患者・クライエントとなる若者は全体のごく一部である。思春期・青年期は疾風怒濤の時代と呼ばれ、誰しもアイデンティティの確立という発達課題を前にして、親子関係・友人関係・過去の経験・将来の展望等で、混乱を来たしたり苦しんだりすることがあるものである。このような若者が、今日一般的になった「写真」という手段を用いて、少しでも自分の過去・現在そして未来を考えやすくすることができれば有益である。

「持ち寄り写真投影法」には「投影」という言葉が用いられているが、ここでいう「投影」とは野田（1988）の“「写真による環境世界の投影的分析方法」、略して「写真投影法」と名付ける（203頁）”に基づく用語であり、精神科・臨床心理領域における「投影法による心理検査」という意味は持っていない。投影法にお

ける心理検査法には、その検査が測定すべき内容があり、アセスメントが客観的・厳正に行われるべく開発されているが、「持ち寄り写真投影法」にはこのような心理検査に近づけようという目的はない。

また、臨床的面接を何度も蓄積して患者・クライエントの人物像を把握することと、どちらが優れているといった比較をする目的もない。「持ち寄り写真投影法」による結果は客観的な測定なのかという疑問には意味がない。写真投影法は、他の心理アセスメントの結果と整合性のある測定結果を資料として残すために行われるものではない。

さらに「持ち寄り写真投影法」は、著名人の伝記等の作成を補完する目的はもっていない。一般人の生い立ちを写真で語って何になるのか、語られた内容が客観的事実と一致するか確かめようもないではないか、といった疑問にも意味がない。人にはみな心があり、人生の歴史（ライフストーリー）がある。誰でも自分の人生の主人公であり、意味のない人生、無駄な人生など一つもない。一般の若者一人ひとりにも成長の歴史があり、それらに寄り添うのが大学教育を含めた教育という営みであり、本研究はこのような理念に基づいて行われる。

従来から心理学では、客観性や実証性を重んじ、数値データに統計処理を施して結論を導こうとする研究が重んじられているが、そういった方法では捉え切れない、人生の個別性の問題を扱いうるのが質的研究である。ある語りが事実を多少歪曲していたとしても、本人がその出来事をそのように捉え、自分の中に位置づけているという意味で、それは本人にとっては事実なのである。

加えて本研究における「持ち寄り写真投影法」では、新しく撮影した写真のみでなく、過去の写真を持参してもよいこととなっている。これは、過去の出来事に対する現時点での解釈も含めて、現時点での自己発見・自己表現を目的としているためである。成長に伴い、過去の出来事を当時と異なる解釈で捉えられるようになるということがある。例えば過去に親を一方的に責めるような感情を持っていた子どもが、成長するにつれて当時の親の立場も理解できるようになり、出来事の解釈がより成熟したものとなることがある。この意味でも、本研究では「若者の成長を援助する」技法として、「持ち寄り写真投影法」を位置づけている。

本研究の結果部分では自己発見・自己表現に写真がどのような用いられ方をするか、その表現方法の個別性に焦点を当て、違いが際立つ組み合わせとして、BさんとCさんのプロトコルを紹介した。本研究では4人に写真投影法に参加してもらっている。AさんにはAさんの、DさんにはDさんの撮影方法があり、それで全く何の問題もない。紙幅制限ゆえ4人全員のプロトコルは紹介できなかったが、それは残りの2人に対して写真投影法が効果を持たなかったという意味では決してない。

今後の方向性

「持ち寄り写真投影法」における語りの類型化

能智（2000）[7]は、10名の頭部外傷者の語りを収集し、それぞれの人物の物語を記述した上で、それらの内容における共通点を探り、意味づけを行っている。頭部外傷者は性別・年齢・職業状況・受傷の状況などは各々異なっているが、能智（2000）は彼らの物語における共通点をカテゴリー化している。例えば、「他よりもましな自己」「成長した自己」「回復途上の自己」「今ここに生きる自己」「プロテストする自己」などというようにである。そしてこのようなカテゴリーを、二軸によって分類し、座標軸に位置づけるように表現している。さらに、各カテゴリーは、受傷からの時間の経過によってある程度共通の推移をもって語られることを発見し、そこから、頭部外傷に関する語りに、社会科学における「中範囲の理論」に相当するような法則性があるという仮説を導いている。頭部外傷を受けた者のライフストーリー、すなわち受傷から回復、そして現実への適応へのプロセスには、ある程度の共通の過程がある可能性が提言されている。

インタビューという手法を用いた質的研究は、研究者の主観に頼る部分が大きく客観性に欠けるといった批判を受けやすい。しかし、能智（2000）の研究例は、質的研究の結果の一般化可能性を拓くものであり、本研究者による「持ち寄り写真投影法」も、このよ

うに結果の一般化をはかってゆきたい。

エピソードの「メタ意味の掘り起こし」

鯨岡(2005)[8]によれば、質的研究におけるエピソード記述では、まずエピソードを客観的に記述し、読み手が書き手と同じ情景を思い描くに充分であることが当然重要であるが、その後あらためてそのエピソードの持つ意味づけや普遍性を考察する必要があるという。鯨岡(2005)はこのような考察を「メタ意味の掘り起こし」と呼んでいる。エピソードの客観的な記述までで終わるのでは、質的研究の素材を提供した段階に過ぎず、それらのエピソードが個別の事例としての位置づけを超えて、普遍的な意味づけを得て初めて、質的研究がなされたといえるのだという。鯨岡(2005)は、看護師が高齢の患者からかけられた「ありがとう、ありがとう」の言葉の重みに後から気づいて衝撃を受けたというエピソード記述の例などを紹介し、客観性から一歩踏み出した、エピソードの持つ豊穣な意味の発見と、そこから立ち上がる普遍的な問題提起の重要性を説いている。そうすることで、単に一人の看護師が患者の臨終を知ってセンチメンタルな気分になっただけだというのではなく、看護とは何か、他者に共感するとはどういうことかを問う研究になりうるのだという。

「持ち寄り写真投影法」においても、人間のアイデンティティの有り様が写真に表れ、本人がそれを語るというエピソードの客観的な記述から、さらにもう一歩「メタ意味の掘り起こし」を丁寧に行ってゆくことが重要であろう。そうすることによって、「単なる少数事例の検討であって結果の一般性に欠ける」という批判を乗り越え、研究をより価値あるものとして位置づけてゆくことができるであろう。

「持ち寄り写真投影法」の普及に向けて

本研究では、4人中2名を取り上げて、実施結果を詳細に記述した。その理由は、実施時の手順と進行の様子をより具体的に読者に伝えるためである。この方法がより多くの人々に活用されるためには、実施方法の細部を読者にイメージしてもらう必要がある。写真投影法のなかでも、本研究における「持ち寄り写真投影法」は、写真を撮り、過去の写真も持参して自分のことを語るという方法である。この方法は、写真投影法という名称で写真を使った心理学的研究を行っている先行研究のどれとも異なるオリジナルの技法である。

引用文献

1) 野田正彰　1988　漂白される子どもたち――その眼に映った都市へ　情報センター出版局
2) 大石千歳(2010)アイデンティティの表現方法としての写真投影法 ―― 撮影内容の個人間比較および3種類の撮影テーマによる個人内比較 ――　東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 45, 131-141
3) 田澤　実　2010　写真投影法を用いた自己理解教育の試み～最終学年の福祉系専門学校生を対象にして～　法政大学情報メディア教育研究センター研究報告, 23, 119-126
4) Erikson, E. H. 1959 小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性:アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
5) 和田夏樹　2011　写真を使って自分を語る 平成22年度東京女子体育大学卒業研究(未公刊)
6) Marcia,J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality and Social Psychology, 3, 552-558.
7) 能智正博　2000　頭部外傷者の〈物語〉／頭部外傷者という〈物語〉　やまだようこ(編著) 人生を物語る――生成のライフストーリー　ミネルヴァ書房, Ⅵ, 185-218
8) 鯨岡　峻　2005　エピソード記述入門:実践と質的研究のために　東京大学出版会

注

本研究における「持ち寄り写真投影法」は、著者の指導のもとに行われた和田夏樹さんの平成22年度東京女子体育大学卒業研究の一部として、平成21年度に実施された。本稿は、実施された「持ち

寄り写真投影法」の結果に基づき、理論的背景と研究目的、および結果の考察等、大幅に加筆を行い、独立した研究論文として新たに執筆したものである。なお、平成21年度の時点では、本学に研究倫理審査委員会やこれと目的を同じくした組織は存在していなかったが、本文中にも記載したように、研究参加者（写真の撮影者）に対しては充分な説明を行い、同意を得ている。